

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

中高年女性の総合的健康対策に関する研究

分担研究者 樋口 恵子（東京家政大学教授）

研究の目的と概要 本研究は平成10年度にスタートした分担研究「中高年女性の総合的健康対策」の第2年度にあたる位置づけである。平成10年度において、樋口班ではそれ以前（平成8年度、9年度、厚生省心身障害研究「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」における「更年期における女性の健康支援に関する研究」）の成果を踏まえたものである。したがって研究の主要テーマの1つを、更年期女性の自覚症状に関する実態調査、国内外の比較研究としている。すでに今年度までに、日本国内においては、40代、50代、60代の世代間格差、農業従事者、雇用労働者、主婦など就労形態による実態と意識の相違が発見された。

平成10年度からは国際比較に取り組み、今年度は韓国において、国内における調査票を韓国語に翻訳しかなりの調査結果をあげることが出来た。なお、中国においても、同じプロトコルを経て、現在分析中である。韓国は本年度内に65歳以上人口7%を超え、日本に次いでアジアで2番目の高齢化社会となり、その後の人口高齢化のスピードは日本を上回ると予測される。一定のタイムラグを置きながら中国でも同様の事態が起こるであろう。経済発展の水準はじめ多くの相違点を持ちつつも、儒教の影響など共通性をもつ韓国・中国において更年期女性の自覚症状と社会的家族的背景に関する調査を実施したことは、それぞれの国における調査研究に影響を与え得るだろう。

研究協力者名

袖井孝子（お茶の水女子大学教授）、沖藤典子（著述業）、富安兆子（北九州大学非常勤講師）、村岡洋子（京都短期大学教授）、平野順子、林千根

今年度、更年期に関連して新たに付け加えられたテーマは、高齢者介護が子育てに与える影響に関する考察である。すでに平成9年度までの国内調査において、日本の更年期女性の家族的悩みは、高齢者介護と子どもの受験の板ばさみ状態であることが明らかにされている。今回は、本研究班の会員がメンバーである「高齢社会をよくする女性の会」が1997年にとり組んだ「女性の視点から家族介護における実態調査」結果に、関係する自由記述が多いことに着目、該当例を抽出し課題を整理した。近年、少子化に伴って子育て支援策が計画・実施されているが、多くは乳幼児期の対策に集中している。しかし、親が精神的な子育ての悩みに直面するのは、むしろ子どもの思春期すなわち受験期であり、母親はこの時期に中年期を迎え、

更年期のなかにいる。ここで介護の責任を担うとき、現在と将来の女性の心身の健康支援と適切な家族支援に資する研究を目標として来年度に続ける予定である。

今年度新たに発足した研究テーマは「中高年女性の総合的研究」というテーマに即して、「更年期」すなわち高齢女性の健康づくりに関するものである。65歳以上人口の60%を女性が占め、とくに80代以上の女性は男性の2倍に達することを思えば、まさに「高齢女性の健康こそ社会的資源」である。今年度においては、試験調査の位置づけで調査票を作成し、80代元気女性に対する生育歴・生活歴と現状について85票を回収、うち41票について研究、結果の概要と典型例を取り出し、そこから類推されるいくつかの仮説を設定し、来年度の本格調査に備えている。

研究方法と研究体制

韓国における高年期実態調査は、平成9年度研究報告書に記載されたのと同じ調査票を韓国語に翻訳依頼、また平成10年度報告書に記載された英文翻訳調査票をもとに韓国女性開発院研究者がチェックした。調査は韓国女性開発院に依頼して面接調査を実施、1999年10～11月522名から回答を得た。調査対象者の抽出方法は、日本において実施されたのと同様の手法で、つてをたどって対象者をひろげたものである。集計処理はお茶の水女子大学袖井研究室でSPSSを用いて分析、執筆は袖井孝子である。

また本年は、高年期の国際比較に関してインドのDr. ウベロイ（デリー大学教授）からヒヤリングする機会に恵まれた。お茶の水女子大学ジェンダー研究所（原ひろ子・所長）の厚意によるものである。国により文化により、同じアジアにおいても更年期に関する認識の格差を知ることができた。

更年期と子育ての悩みに関する研究の出典は「女性の視点から家族介護についての実態調査」（1997年、高齢社会をよくする女性の会。財団法人東京女性財団1997年度助成研究事業）である。この調査は有効票数897票という大規模なもので、厚生省・介護保険事業、老人保健事業などの政策に影響を与えている。この中で、子どもの不登校や受験、教育費の心配など思春期の子を持つ母親の深刻な悩みが散見されたため、「介護と子育てに関する記述」のある調査票を改めて抽出、そのうち代表的な例の問題を整理・記載した。この企画と整理にあたったのは樋口恵子である。

80代元気高齢女性調査はHerstory of Her Healthと名付け、まず80代女性の有識者・吉沢久子氏からの健康歴ヒヤリングと助言を受けた。その結果にもとづいて調査票を作成、高齢社会をよくする女性の会会報によって調査者を公募し、調査票および調査のプロトコルを郵送、面接調査を依頼した。ヒヤリングと調査表作成には樋口恵子、沖藤典子、袖井孝子、富安兆子、村岡洋子の主任・分担研究者全員が参画した。調査結果の整理と執筆担当は、沖藤・富安・村岡である。

結果と今後の研究方針

韓国における「更年期調査」は、翻訳の困難、社会的文化的背景の違い、教育程度の格差など種々の問題点に直面したが、日韓の比較について将来の研究の基礎となる一定の成果を得た。「自分には更年期はない」がどの年代にも3割を占めること、身体症状・精神症状とも韓国女性の訴えが多くとくに有職者に顕著であること、ホルモン療法利用者が日本より高く無職者に多いこと、など日本との共通点・相違点が浮かび上がっている。来年度は、すでに回収済みの中国の調査と集計分析すると同時に、英語圏における調査を実施、世界の更年期の実態を明らかにして、地球規模で高齢化する社会のリプロダクティブヘルスに貢献する研究をまとめる予定である。

さらに、更年期に日本女性が直面する介護と思春期の子育てについては、来年度は新たな実例を集めてケース・スタディを実施、さらにメディアに事件としてあらわれた祖父母と思春期・青春期の孫との人間関係を考察・分析する予定である。

80代健康高齢女性の調査（Herstory of Her Health）は本年度初めて立ち上げた研究テーマであるが、生活習慣としてはバランスのよい食生活、精神的要因としてはくよくよしない、などの共通したキーワードが浮かび上がっている。来年度は調査票の精査と必要な訂正を加え、100票を目標にサンプル数を加え、女性が元気に自立しておいでいくためのキーワードを完成させる予定である。